
姉弟

kimra

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉弟

【Nコード】

N1419W

【作者名】

k i m r a

【あらすじ】

梅雨のある日、探偵 綾部垣内の事務所にある依頼人がやってきた。助手と共に調査を開始するが、そこにはある秘密が隠れていて・

一人の男がいた。

辺りは寝静まり、聞こえるのは雨の音だけ。男はポケットに手を入れ、俯いていた。どこかで犬の鳴き声がする。

それはすぐに雨音にかき消された。

男は複雑に唇を歪めゆっくり瞬きをすると、濡れるのも構わず小雨の降る中を歩いて行った。

雨が降っていた。梅雨入りして以来、毎日のようにこうである。

机に向かい、暇そうに欠伸を繰り返していた男―綾部垣内―は、近づいてくる足音に耳を傾けた。

「綾部さん。仕事は来ましたか？」

ドアを開けて入ってきたのは、高校生くらいの少年だった。身長はお世辞にも高いとは言えないが、バランスのとれた体付きに品よく整った顔。しかし、金髪の短い髪の毛がその高貴なイメージをぶち壊している。

「やあ、鵜くん。^{つぐみ}元気だったかい？」

垣内はにっこり笑って手を上げた。名前を呼ばれた少年―久次鵜―^{ひさつぎつぐみ}は引きつった笑いを返し、すぐに真顔に変わる。

「元気も何も昨日も会ったじゃないですか。暇そうですね」

「はい」

垣内は悪びれた様子もなく童顔の、どう見ても鵜の同級生としか思えないきれいな顔を縦に振った。

さらさらした柔らかそうな色素の薄い髪。長めの前髪の下からは、薄茶色の瞳が覗いている。怪我でもしたのか、左目は黒い、少し変わったヘアバンドのようなもので覆われていた。

「いくら不景気たって、二週間も仕事がないなんてシャレになりませんよ。せめてバイトするとか……。聞いてるんですか、綾部さん」
鵜は机の横で大声を上げている自分を尻目に、何か考えている垣内に気付き、机を叩く。

垣内はそれに動じる様子もなく、不敵な笑いを浮かべて囁いた。
「お客だ」

垣内の声からしばらく遅れて、二十代後半の女が入ってきた。顔は美人とはいえないが、細いたれた目が人の良さそうな雰囲気を出している。

「いらっしやいませ。綾部探偵事務所は、迅速かつ信頼の仕事を目指しております。どうぞ」

垣内は愛想よく、広い部屋の中央に置かれたソファを勧め、自分もその向かい腰を下ろす。

「鵜くん、お茶を入れてくれたまえ」

「ああ、はい」

鵜はその態度に半ば呆れ返りながら、隣の部屋へと去っていった。
「あの……」女は困惑した様子で垣内を見つめる。「失礼ですがおいくつなんでしょうか？」

どうやら女は高校生の外見をした彼を不審に思っただけらしい。その問いに垣内は白々しく驚いて見せ、

「四十二です」

と、あっさり答えた。女は信じられないという表情を顔に浮かべ、口を手で覆った。

「嘘ですよ。彼は二十四歳です」

ちょうどその時、熱いコーヒーを淹れ終えた鵜が入ってきた。コーヒーを二人に配り、垣内の隣に腰かける。

「綾部さん。そんなことばかり言ってるから、依頼が来ないんですよ」

「すみません」

垣内はペコンと頭を下げた。その言葉に反省の色はない。

「ところで用件は何ですか？」

垣内は女に向き直り尋ねる。女は帰りたそうな様子を見せたが、深呼吸をすると諦めたように話し出した。

簡単に説明するところだった。

女の名前は椎村世華^{しいむらせいか}

二日前の夜、弟の泰樹^{たいじゅ}が出て行ったきり戻らないとの事。近くの道路で車は発見したが、泰樹の姿はなし。その弟の搜索。

「椎村さん。一つお聞きしてもよろしいですか？」

垣内は一通り話を聞き終えると、満面の笑みでそう言った。世華は

「はい」と力なく答える。垣内は続けた。

「警察には搜索願を出されてるんでしょうね」

「え……、あの、はい」

女は曖昧に頷く。垣内はその答えに口に手をあて少し考えていたが、

「わかりました。お任せください。連絡先は……ああ、こちらですね。鶴くん、質問はあるかい？」

「いえ……、別に」

「そうかい？ それでは後はこの綾部垣内にお任せください」

そういつて彼は天使のような微笑みを世華に向けた。

「大丈夫なんですか？ あんな大きい事言って」

机の上に長い脚を乗せ、新聞を読んでいた垣内に鵜が問う。垣内はさきほどのコーヒーカップを片付けている鵜に手招きして見せた。鵜はいぶかしみながらも近づく。

「弟の行方は分かってるんだ」

垣内はそう言う小さな新聞の記事を指さした。鵜は驚きながらその記事に目を通し、おおきなため息をつく。そこにはこう書いてあった。

『道路脇の草むらで脱ぎ捨てられた身元不明の衣類一式が発見

裸の持ち主は一体どこへ！？』

垣内は勝ち誇った顔で鵜を見つめている。それが余計に彼を苛立たせた。

「だから何ですか！ それが泰樹くんの服だとしても、中身がいな
いとうしょうもないでしょう」

鵜は新聞を机に叩きつけると、片付けの続きを始めた。垣内は困
ったような笑みを浮かべ、携帯に手を伸ばす。

「ああ、オレ。垣内だけど。東城お願いします」

「俺だけど……っていうか俺の携帯だから当然だろ」
呆れたような低い男の声が聞こえる。

「何か用か？」

「用がなきゃ掛けないでしょう」

そう言う垣内は、姿の見えない相手に微笑んだ。

「こんにちは」

軽いノックの後、目つきの悪い二十代の男が入ってきた。

「あ、高峰さん」

「やあ」

たかみねとうじょう

高峰東城は部屋の掃除をしている鵜の方を見て、軽く手をあげた。そして、そのままソファに直進する。

「垣内は？」

その問いに鵜は苦笑し、

「今、お昼寝してるんです……。すぐ起こしてきます」

そう言って足早に出ていく。高峰はため息をつき、「やれやれ」と手を広げた。

ここ、綾部探偵事務所は三階建てで、主に一回は事務所、二、三階が家になっている。一とはいっても住んでいるのは垣内一人で、鵜は近くのアパートから通っていた。

それから約五分後、垣内はTシャツにスウェットというラフな服装で現れた。寝たりないのか、やたらと目を擦っている。

「お前、人呼び出しといて寝るなよ」

「ごめんごめん」

垣内は怖いと噂の高峰の目をまっすぐ見て微笑んだ。

「それで、椎村世華。本当に聞いたことないんだね？」

「ああ。椎村泰樹という男の搜索願もでてないし、そういう名前を聞いたこともないらしい」

「え……。でも……」

掃除を続けながら聞いていた鵜は、手を止めて二人を振り返る。垣内は満足そうに口を歪めた。

「だいたい二十二歳にもなる男が二、三日帰らなかったからってなんだっていうんだ。どこぞやの皇太子じゃあるまいし」

鵜は掃除機を放り出し、眠そうに欠伸をする垣内の隣に座り、頷く。

「ありがとう、東城。オレ、もう一眠りするね。おやすみー」

そう言うと垣内はソファから立ち上がった。

「おいおい、まさかこれだけのためにこの雨の中来いって言ったの

か？ 電話で済むだろ」

高峰はつり上がった目をますますつり上げ、ドアへ向かう垣内の腕を掴んだ。垣内はそれには動じず眠そうな目で精一杯の笑みを作り、

「いいじゃないか。久しぶりに会いたかったんだ」

とあっさり言い残し、何食わぬ顔で去っていく。

「す…すいません、高峰さん」

「いや……、いいよ。あいつは昔からあだから」

高峰は、鵜に引きつった笑顔を返し、疲労の色を見せつつ帰っていた。

その頃、高峰の苦労をよそに垣内はすでに夢の中にいた。

久しぶりに雨が上がり、少し青空が顔を覗かせていたその日、二人の男はあるアパートを訪ねていた。

「すいません。突然うかがって。あ、どうも」

垣内は出されたインスタントコーヒーに砂糖を三個とミルクを注ぎ、うまそうに飲む。横で見えていた鵜は何度見ても慣れないその光景に顔をしかめ、ブラックのままのコーヒーを啜った。

「それで、何か分かったんでしょうか？」

「いえ、何も」

垣内は無邪気にそう言った。世華はこの垣内のテンポに明らかに困惑し、引きつった笑顔を顔に浮かべている。

鵜は助け船を出そうと世華に話しかけた。

「あの……、弟さんのことなんですが、どうして嘘を……」

と、そこまで話した鵜の前でポチャンと音がした。無意識に目を移すと、垣内が二個目の角砂糖を鵜のカップに入れようとしていた。

「な……、何するんですか！」

「ブラックなんて体に悪いと思ってね」

そう言っただけで笑った垣内の瞳は、鵜に強く訴えかけていた。「言うな」と。鵜は玩具のように首を縦に振る。

垣内は角砂糖を元の容器にもどし、取りとめのない話を始めた。

「鵜くん、あの女の部屋をどう思った？」

アパートの階段を下りながら垣内は尋ねる。鵜は二十センチ以上も差のある垣内を見上げた。

「どうって……。2DKのアパートで、部屋は6畳くらい。もう一部屋は見えないから分からないけど、多分泰樹くんの部屋ですね」「ほかに？」

鵜は少し考え込み記憶を辿る。

「他には……。壁に穴があいてましたね……」

「確かに。台所は？ 見たかい」

垣内は彼の肩よりも小柄な金髪の少年を見下ろしながら、意味ありげに笑う。鵜はその視線に気付くことなく俯いて視線を泳がせた。

「ええ……。入口にありましたから……。それが何か……？」

「フライパンがね、床においてあったんだよ」

「買い替えたので捨てるためにじゃないですか？」

鵜はそういうと垣内を見上げた。彼は苦笑していた。

「台所には新しいものがなかった。料理本や鍋を買い揃えて料理をする人が買う前に捨てるかな？ ましてゴミに出せる日じゃないのに」

不思議そうに眉を八の字に寄せた鵜を見て、長身の彼は悪戯っ子のように嬉しそうに笑った。鵜は息を一つつくと周りを見渡す。

右の方に駐車場が見えた。

「じゃあ、なぜフライパンが……。まさか……」

鵜は駐車場の方に向きを変えた垣内を追いながら、一人呟いた。やっと垣内の言わんとすることがわかったらしい。

「まさか、世華さんが何か……？　じゃあ、なぜ、依頼を……」

垣内は振り返り、にっこりとほほ笑んで見せた。そして鵜が隣に来るまで待ってから、

「なんでだろうねえ。ただ、東城に軽く聞き込みしてもらったところ、泰樹くんはいつも世華さんから金をせびってたそうだよ。結婚ぶち壊したりね」

あっさりそう言っただけのけた。鵜は頭の整理ができない様子で腕を組む。垣内は不思議な笑みを浮かべた。

「あっ……と、これだこれだ」

垣内の声に鵜が我に返ると、彼は駐車場の一番奥の端にある黒いワゴンボックスカーの前にいた。

「その車がどうかしたんですか？」

そう言いながら近づく鵜に、垣内は大げさに手を広げてみせる。

「これが泰樹くんの車でーす」

鵜は呆れ返った。事実、世華は車の特徴も何も言っていなかったし、新聞にも載ってなかったのだから分かるはずはない。

「なんで分かるんですか？」

鵜はため息とともにその言葉を吐き出した。

「もちろん勘だよ。カ・ン」

思った通りの答えに、鵜は体中の力がどっと抜けた気がした。肩の辺りが大きな岩を背負っているように重い。

そんな間も垣内は車の周りをくるくる回り、なぜか手を合わせたりにしている。

鵜は自分と同じくらい歳の見える、やたら背の高い彼を見ながら頭を抱えた。

夕立のような強い雨が降っていた。周りの世界は遮断され、世界は滅びたような錯覚に陥ってくる。

その時電話のベルが鳴った。突然現実に戻された垣内は、珍しく不機嫌な声で携帯を取り上げた。

「はいー、こちら綾部です。ご用はー？」

電話の向こうでは更に不機嫌そうな声。

「お前、着信入ってたから掛け直したのに何度電話しても出ねえし、やっと思っただけそれかよ…」

電話の相手、高峰東城は怒るのを通りすぎ、呆れているようだ。ため息交じりの声が聞こえる。

「あははは。ごめん。いい気分のところ邪魔されたから。悪かったよ」

垣内は相変わらず、反省の色なく軽い調子で言った。

「ところで、今日は何なんだ。来いってのは遠慮したいな。今、外から戻ったんだが外は大雨だぞ」

垣内は窓の外を見ながら軽く相槌をうち、長い細い脚を組む。電話の向こうで「高峰さん、タオル」という女の声が聞こえた。

「こないだの椎村世華のことだけど、頼みたいことがあるんだ」

その少年のように無邪気に笑う彼の言葉に、東城は急に小声になり、「おい、無茶なこととはできないぞ。そんなことしてたら仕事できなくなっちまう」

と囁いた。その様子を想像した垣内は思わず吹き出し、笑い出す。東城は気分を害されたらしく、「切るぞ」とドスのきいた声で言った。その言葉に慌てる様子もなく、

「ごめんって。そんなんじゃないからさ。君を敏腕刑事と見込んでお願いがあるんだ」

と、まだ少し笑いを堪えながらもまじめな声で言う。

彼とは今年で八年に付き合いになる東城は、嫌な予感を感じていた。垣内のお願いにろくなことはない。

実際、東城の予感は当たっていた。

「うわっ……、何するんですか。オレ、嫌ですよ!」

その日、綾部探偵事務所では一人の少年がその犠牲になっていた。
「いいじゃないか。これも給料のうちだよ」

垣内は相変わらずの天使の微笑みを鵜に向けた。鵜はしぶしぶ椅子に座る。

「ふふふ……、最初からおとなしくしていればいいんだよ」

「その意味ありげな言い方やめてください!!」

鵜はきれいな顔を精一杯歪めて垣内を睨む。垣内はそれに子供の
ような笑顔で答えた。

現在、彼に敵う者はいない……。

二時間後、そこには見たこともない少年がいた。ツンツンと立てた茶色い髪、長く細い眉、薄い唇そして細いたれた目……。

「やあ、泰樹くん。これに着替えてくれるかい」

そう言う垣内は短いTシャツと細身の革のパンツを手渡した。

「本当に大丈夫なんですか? だいたいなんで泰樹くんの顔知ってるんですか?」

鵜は着替えながら、やたら重そうなピアスや指輪を用意する垣内に
問いかけた。

「彼女の部屋で見たんだ。写真をね。言った通り演じてくれるね。
演劇部、部長さん」

「わかってますよ」

確かに鵜は中学・高校と演劇部で部長をやっていた。演技の方も
まずまずで、劇団にスカウトされたこともある。そんな鵜が今ここ
にいるのも運命というやつか。

「写真なんてあったかなあ……」

これでも一応、部屋中を観察したつもりだ。でも写真があったという記憶は見つからない。

鵜はあれもこれもと、アクセサリーを吟味する垣内を見た。

（何者なんだろう……）

度々感じる疑問だった。いつもにこにこしてピエロ役を演じているが、時々非常に鋭いことを言う。だいたい左目を隠していること自体、かなり胡散臭い。

前に一度、冗談ぽくそれを取ろうとしたことがあった。その時垣内は今まで見せたことのないほど険しい顔で、鵜を叱りつけた。その時以来、それに触れないのが暗黙の了解だと鵜は思っている。きつとなにか深い理由があって、それには触れてほしくないんだ、と。

雨は止んでいた。けれど辺りは暗く、どんよりと曇っている。時折、ごうごうと悲しげな悲鳴を上げる空は、今にも泣き出しそうだ。

「おいおい、垣内。本当に椎村世華は弟を殺したのか」

東城は折角の休みに垣内に呼び出され、しぶしぶ事務所を訪れたのだ。そこには、垣内ともう一人知らない少年がいた。その少年が鵜だと気付いたのは、お茶を出され、「どうぞ」という言葉を聞いた時である。

「そんなこと言ってないでしょ。鵜くんといい、せっかちなあ。

まあ、東城はそれで声を録音してよ。それと証人役ね」

そういつて微笑む垣内の顔は自信に満ちており、それを肯定しているようにしか思えなかった。

東城はそんな垣内から目を移し、隣を歩く鵜を見る。

穴のあくほど見ても、彼から鵜の面影を見出すことはできなかった。垣内は、

「鵜くん頼んだよ。君にかかっている。まあ、人間なんて動揺すると細かいとこなんて見てないだろうけど」

と、にっこり笑った。

泰樹の顔をした鵜は細い目で垣内を睨むと、「わかってんよ。しつこいんだよ、ジジイ」

鵜とは思えぬ返答をする。どうやらもう役に入ってるらしい。

声まで違うその少年に東城は驚きを隠せない様子で、自分よりさらに背の高い垣内を見た。彼は鵜の発言に気を悪くした様子もなく、満足そうに微笑む。東城は二人を互いに見比べながら垣内に尋ねた。
「この声は・・・？」

「もちろん泰樹くんの声の感じを教えたんだ。全く、鵜くんは天才だよ」

「お前なんで声まで知ってるんだよ。まさか」

その問いに垣内は意味ありげに笑った。

「彼の友達に聞いたんだよ。もしくはイメーজかな」

東城は自分より一つ年下の彼の小悪魔のような笑みを見て、「これ以上何を聞いても無駄だ」と悟り口を噤んだ。

まもなく目的の場所、椎村世華のアパートに到着した。雲が低く垂れこめているせいか、ひどく不気味な感じがする。

垣内はそんなことは気にも留めず、意気揚々と世華の部屋に向かう。二人も後に続いた。

「こんにちは。世華さん」

ドアを開けて出てきた女に、垣内はいつもの調子で声をかけた。世華は疲れ切った顔で無理やり笑顔を作る。

「あ、こっちは友達の高峰です。今から遊園地に行くところなんです」
こんな天気の日には遊園地。東城は垣内のその言葉に呆れながら、愛想笑いをしてみせた。署内でも怖いと評判のその顔に世華は怯え

ながら疑いのまなざしを向ける。

垣内は正反対の天使の笑顔で話しだした。

「実は泰樹くんが見つかりました」

その言葉と同時にドアの陰から鶴ーいや、泰樹が現れる。俯き加減でだらだらと歩き、世華に近づくとクツと笑った。彼女は一生懸命平静を保っているようだったが、顔色と小刻みに震える唇がそれを裏切っていた。

「あー痛いなあ。なんかあちこち痛むんだけど。誰かさんのせいで」「しっ知らないわよ。やめなさいよ。人前で……」

世華は弟だと本気で信じているらしい。まあ、無理もないことだが……。

「へっ、人前じゃなきゃ何してもいいのかよ。人殺しとか？」

その言葉に世華は可哀想なほど動揺した。傍観者に徹していた垣内の口が怪しく歪む。

「なにを言ってるのよ！ あんた……こんなにピンピンして……生きてるじゃないの。私は殺してなんかなかったのよ」

世華は垣内たちの存在も忘れ、玄関先で叫ぶ。

「君……」

世華に近づこうとする東城の肩を垣内が掴んだ。そして、小声で「まだだよ」と囁く。その表情はいつもの笑顔と打って変わって冷ややかなものだった。

「でも事実是不変わらないぜ。あんたはフライパンで……」

そこまで言うとき泰樹は世華を見下ろしフツと口を歪める。世華はもうすでに我を忘れていた。顔は蒼白で、額には冷や汗が浮かんでいる。彼女は奇妙な笑みを浮かべた。

「フライパンで何度か殴ったからなによ。あんたは生きてるわ。その上頭の傷も大したことなかったみたいね。あんなに血が出たから、てっきり死んだかと思ったわ」

そこまで彼女が言ったところで垣内は口を挟んだ。

「そして、血を流して倒れてる泰樹くんをおいて逃げ、戻ってきた

ら彼がいなくなっていた。それで困って依頼して来られたわけですね」

「そうです。生きてるのか死んでるのかどうなったのか気が気じゃなくって……。車は道路わきに乗り捨てられてるのを見つけたけど、あんたはいなかった……。本音を言えば死んでて欲しかったけどね」

世華は意地悪な魔女のように笑った。でもどこか悲しげな落胆したようなそんな影を含んでいる。

垣内はそんな世華にもう興味はないのか、体の向きをくるりと変え、「死んでて欲しかったんだって。鵜くん」

そう泰樹に向かって話しかける。世華は啞然としてその様子を見守った。鵜は背筋をピンと伸ばし、垣内を見上げて答える。

「ええ……。聞きました。今……」

世華は驚愕した。当然といえば当然である。弟だと信じていた人物から聞き覚えのある声がもれたのだから。

世華はしばらく状況が呑み込めずぽかんと口を開けていたが、突然我に返り垣内に掴みかかった。

「じゃあ……。泰樹はどこ行ったのよ。弟はどうなったのよ！」

「さあ……。彼の行きそうな場所は、あなたの方が詳しいでしょう。死んだ後も……。ね」

そう言うと天使の微笑みを少し歪め、手で東城に指図する。東城は彼女を垣内から離し、持ってきていた警察手帳とボイスレコーダーを見せた。世華は大きく目を見開く。

「あっ……。私、本当に殺してなんて……。知らないんです。本当に……」

「話は署の方で聞きましょう」

垣内は明るく芝居じみた口調でそう言った。――東城のセリフを。世華は気が狂ったように首を振っている。それを東城が優しく階段へと促した。

「大丈夫。話を聞くだけですから」

そう優しくなだめるように言うが、顔は相変わらず怖い。世華は

諦めたように頷いた。

そして立ち去ろうとする東城に垣内はこっそり耳打ちをする。

「早めにうまく言って帰してあげてね。死体は見つかんないから」

「お前、やっぱり……」

垣内は愛嬌たっぷりににっこりと微笑んだ。

空は泣いていた。

男はその中を傘もささずに歩いている。男の横を一台の車が通り過ぎ、間もなく「ドン」という鈍い音と共にタイヤが悲鳴をあげた。雨のため、かなり遠くで止まった車から小柄の男が降りてくる。

「ちっ、猫かよ。今日はマジにツイてねーぜ。車傷ついてないだろうな」

よく見ると、道路の端の方で黒いものがビクビクと動いている。

男はその一部始終を見ていた。

「くそっ。いてて……。あの女、覚えてろよ」

小柄の男は頭を押さえながら、車に戻ろうと向きを変えたが、背中に視線を感じ振り返る。

そこには背の高い、濡れそぼった男が立っていた。頭に怪我をしているらしいもう一人の男は、頭に巻いたタオルを触りながらじろじろと長身の男を見た。

「この猫……、死んじやいましたよ」

スラリと縦に長い男がぼつりと呟く。猫は痙攣も治まり、静かにそこに横たわっていた。小柄の男はプツと笑い、

「だから何？　猫だよ、猫。全く、今どきのガキはやたらでかくなりやがって」

と、さもおかしそうに言った。長身の男はそっと猫の死骸を抱き上げると、左目を覆う黒い布を取りながら言う。

「今日は本当にツイてませんね。この猫も、あなたも」
そう言って微笑む男の左目が銀色に光った。

「なっ……なんだよ、お前」

小柄の男は向きを変えた。しかし、もう遅い。彼の肉という肉、筋という筋、骨という骨は砂になりさらさらと崩れていった。その柔らかな砂を小雨が洗い流す。そして、中身を失った布きれは儚く崩れ落ちた。

男はその衣類を道路脇の草むらに全て蹴りいれると、大事そうに抱えていた猫の死骸を砂に変える。それは雨で柔らかくなった土に消えていった。

男も泣いていた。美しい銀色の瞳がしたたかに輝く。

雨が沈黙の中でたったひとつの音色を奏でていた。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1419w/>

姉弟

2011年11月12日00時23分発行